

限りある自然、変化する自然を人類は生き延びられるのか？  
 - 東日本大震災と原発事故で考える

# 資源から存在へ “自然”という社会様態の構想

犬塚潤一郎, 実践女子大学

## 新しい経済・社会モデルづくりの必要:

- グローバリゼーションの拡大深化に伴い、近代社会モデルの本質的欠陥・限界の露呈
- ローカリゼーションの必要性への意識
  - 資源・エネルギーの制約
  - 信用創造の崩壊
  - 気候変動の進行
  - 共同体、人間性の衰退

## 脱成長 La décroissance: セルジュ・ラトゥーシュ, 『経済成長なき社会発展は可能か?』作品社, 2010

- 価値の転換 *leisure*
- 経済の転換 脱市場
- 生活圏の作り直し
  - ヴァナキュラーな社会: 経済が社会的なものに再び組み込まれる

経済縮減は貧しさを意味するのか?:

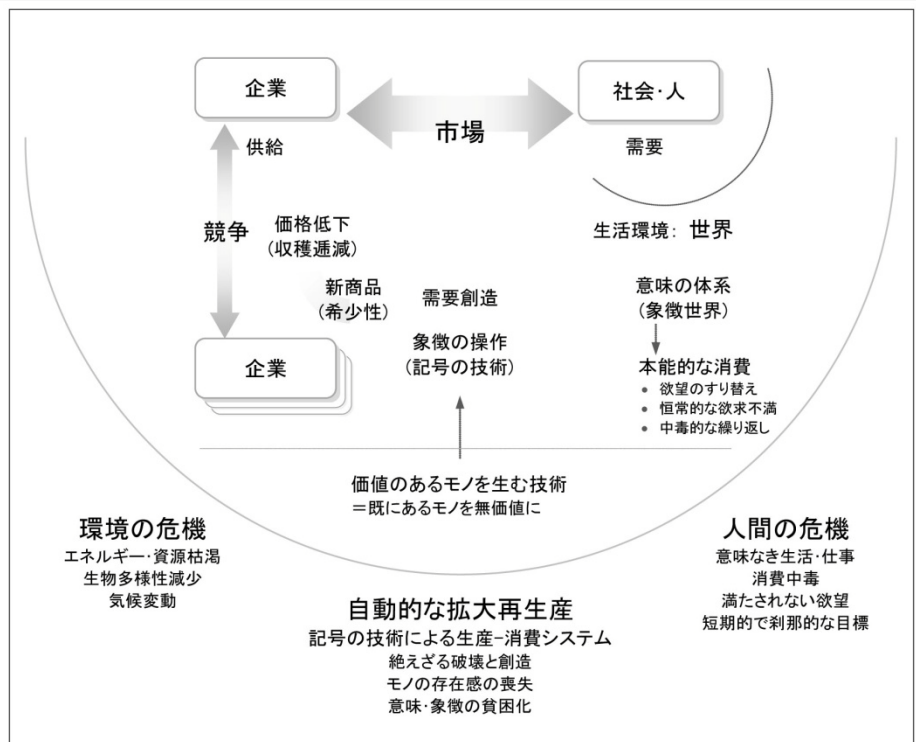
記号的生産・消費: モノの消費が、象徴・意味を消費することになる 社会システム

## 記号的生産・消費のシステム: 記号・金融資本主義 - 象徴世界の操作と信用創造

- 需要創造:  
価値のあるモノを生む  
= 既にあるモノを無価値にする  
/ 嫌悪させる
- 捨てられる商品の絶えざる再生:  
モノの消費が、  
象徴・意味を消費することになる
- 本能的消費:  
欲望のすり替え、  
恒常的な欲求不満、  
中毒的な繰り返し

### 人間性の危機:

- イメージと現実の乖離:
- 生活の私化:
- 刹那的な共同性の回復:
- 世界の無意味化
- 生産手段としての人間性



## 人間の居住圏:

歴史的・文化的な意識の変化: 人間の住まう範囲が拡大し地球サイズに。影響が地球・自然そのものを変化させる

用象化: 技術によって用立てられる自然と人間

“存在”と“自然”: 新しい生の様式

- 技術と経済の新しい様式の探求
- 労働・生活における 人間性(象徴・知)の回復

自然を資源としてみなす、ということに人が抵抗を感じなくなったのはいつ頃からなのだろうか。自然を人の用にどう役立つものであるかを見ることを恥じなくなったのはどうしてだろうか。山は鉱物資源の蓄積場である前に“山”であり、海は無料のタンパク源の供給元(ましてやレアアースの沈殿場)である前に“海”である。そのような“山”や“海”無しに、人が人であることができるのだろうか(人材ではあり得るだろう)。

生物多様性条約第 10 回締約国会議 (COP10) では、多様性の損失速度を減少させることを目標に、手段としては生物資源から得られる利益の配分の公正性が議論された。生命に対する人間の責任は、利益損失の回避を根拠とするというのである。あわせて発表された「生物多様性の経済学 (TEEB)」報告書は、生物多様性の喪失を経済学的な観点から研究した成果であり、事例を挙げて(可能性を含む)利益維持の手法を検討する。

しかし実のところ TEEB 報告書の本文は、生命現象を経済尺度に一元化することに恥じる言葉で満ちてもいる。

自然は用材である前にそれ自体としてあり、またそうであるからこそ、人間は自身の可能性を絶えずそこから汲み取ってきたのである。その変わらぬ(と思われてきた)関係が、今日別のものへと転換してしまった。もはや人工と自然、人の住まう場所=都市と、その基盤となり支える自然=野生、という対立構造は実質的に無意味になってしまった。人間の居住圏が地球のサイズに広がり、外なる自然の場所が残されていないのである。傷つきやすく、保護の対象とすべき自然と生命とは、もともと儂い人間の社会や文化に対するのと同じ姿勢の向かうものである。そこには悠久不変の、偉大な自然の姿はもはや残されてはいない。

私たちは自らの世界観を問うにあたって、このような現実からはじめるべきである。文明・文化を自然との対置によって定義づけるのではなく(各々都市化、有用・意味化を語源とする)、人のありよう=存在の内に自然を位置づけることである。現代社会ではそれは用材・資源としてしか主に現れてこない。豊富にあったものが希少になってしまったので、これからは大切に使おうというばかりである。

自然および人間をその存在のもとに捉え直すこと、言い換えれば(文化・文明に代わる)“自然”という社会・世界観をつくりあげることが課題となるのではないだろうか。その際には、東洋的な自然観(人間観)が参考となるだろう。